朝日新聞　第3種郵便物認可

Voice 声100年　オピニオン

私の誇り 18歳重症障害の孫

無職　大場　勝（大阪府　80）

相模原殺傷事件から半年が過ぎた。

人は何というか知らないが重症障害の孫はわたしの誇り立つことも座ることもできず側彎（背骨の歪み）で寝返りもできず　言葉は発せず

しかし　この顔を見てくれたまえ　ここには思春期から青年期へ向かうひとりの若者の顔がある　感性も知性も備えつつある若者の顔がある

知能は二歳児のそれにも達しない　だが十八年をこえる時間を　人とのかかわりの中で過ごす間に　泣いて　怒って　喜んで　大笑いして　自分の知力の　狭い範囲ではあるが　彼らしい人間らしさをつくりあげてきた

それは家族はもちろん　学校の職員や　家に来て介護にあたってくれる人たち　医師や療法士や看護師との　人間的な触れ合い無しには得られなかった

そのつながりの中でこそ可能になった　人の愛の力が重なり集まって　ひとりの重症児の　人間らしさが形成された

それを十八年間横にいて　見つめ助け　確かめることができた　それが私の自慢　そして私の誇り　だから

重症障害の孫は　ひそかなだが　たくさんの人に　教えてあげたいような　私の誇り

自由で知的 三浦朱門君悼む

大学名誉教授　佐藤　喬（東京都　91）

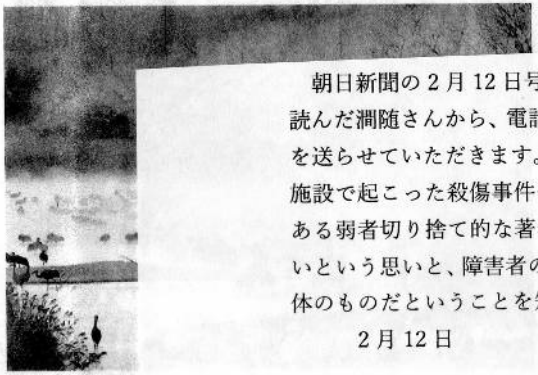
三浦朱門君は東京府立第一中学校（現・都立立川高校）の同期生。物静かな文学青年だった。

ある日、私が駅で英英辞典「ポケットオックスフォード」を引いていると、「おい、すごい辞書を引いているな」と肩越しに手元をのぞき込む人がいた。三浦君だった。

英語は敵性語とされ、コソコソ勉強していた時代。「うちの学校にも、この辞書の値打ちを知っているやつがいたんだな」と心強い気がした。

学校を出てから接点はなかったが、気になる存在で著書は読んでいた。代表作「箱庭」は、戦後日本の家族崩壊を知的に描いた作品として知られる。タブーを気にせず英語辞書について語りかけてきた、自由で知的な彼らしいと思った。また、古い武蔵野が題材になった「武蔵野インディアン」「武蔵野ものがたり」は若かりし日々を思い出し、懐かしく読んだ。

戦中、陸軍の兵長として旧満州にいた私は、思いがけずこの年まで生き永らえ若き日の友を追悼する身となった。



新嵐に舞う

朝日新聞の２月12日号の「声」欄に、私が投稿した詩が載りました。新聞を読んだ澗随さんから、電話が入りました。それで他の五名の方に、新聞のコピーを送らせていただきます。（自分の作品のＰＲではありません。相模原の障害者施設で起こった殺傷事件への怒りと、一若者が犯行に至った考えとその背景にある弱者切り捨て的な著名人の発言について、多くの人に再認識してもらいたいという思いと、障害者の人権は、そのまわりで介護にあたる人たちの人権と一体のものだということを知ってほしかったのです。）

２月12日　　大場　勝